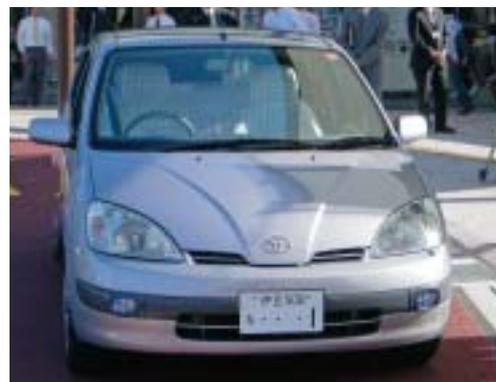


静岡
SHIZUOKA

伊豆ナンバー発進

“伊豆はひとつ!!” 伊豆地域の観光振興と地域活性化の期待を込め、伊豆ナンバーが全国に向けて発進した。ナンバープレートは、自動車を使用される本拠の位置を管轄する運輸支局または自動車検査登録事務所の名称等が表示されていた。しかし、2006年度より地域振興や観光振興等の観点から、自動車検査登録事務所の新設の有無にかかわらず新たな地域名の表示（通称：ご当地ナンバー）が認められることとなった。伊豆ナンバーは「仙台」「金沢」など他の16地域とともに全国に向けて産声を上げた。

交付がスタートした10月10日、対象12市町（三島市、熱海市、伊東市、下田市、伊豆市、伊豆の国市、函南町、東伊豆町、河津町、南伊豆町、松崎町、西伊豆町）の行政及び商工・観光関係者らが出席し、「伊豆ナンバー発進セレモニー」がJR三島駅北口広場にて開催された。セレモニーでは、多くの住民が早期に伊豆ナンバーに切り替え、動く広告塔の機能を



発揮していただきたいとの気持ちをこめた挨拶や新ナンバー取り付け・封印イベントが行われた。また、“おもてなし思いやりのところで、交通安全地域、伊豆半島づくり”を掲げた交通安全宣言がなされた。

1999年の活動から7年間の努力がようやく実り、伊豆が元気になる資源を獲得することができた。ある大手旅行代理店では、伊豆ナンバー誕生記念として、伊豆の旅館・ホテルと連携した宿泊商品（ナンバープレートが割引率になる旅行商品・伊豆地域35施設が対象）を企画するなど、早くも効果が出始めている。

「伊豆」は、地元にとり何よりも親しみのある地域名称であり、ナンバープレートに使用されることは、地域への愛着や郷土愛にもつながると思われる。現在の観光には、地域との触れ合いが不可欠であり、今回の伊豆ナンバーが外に向けてのPRと内に向けてのホスピタリティの醸成に寄与することを願う。

神奈川
KANAGAWA

「灰色のまち」脱皮図る川崎市

川崎市が、「灰色のまち」から「生活・文化都市」へと脱皮を図っている。市の玄関口であるJR川崎駅前には、音楽ホール『ミュージア川崎シンフォニーホール』に続いて、この秋には大規模商業施設『ラゾーナ川崎』もオープン。「公害のまち」「労働者の集うまち」といったイメージは過去のものになりつつある。

『ラゾーナ川崎』は、JR川崎駅西口の東芝川崎事業所跡地（約11万平方メートル）に東芝不動産と三井不動産が建設した。地下1階地上6階で、総床面積約17万2,300平方メートル、店舗面積約7万9,300平方メートル。

ラゾーナは、スペイン語のLAZO（きずな）とZONA（地域）を組み合わせた造語。食・旅・音楽をテーマとする287店のテナントが入り、「大屋根のある街」をコンセプトに直径約60メートルのイベント広場、変化に富む緑が楽しめる「四季の道」なども設けられた。

『ラゾーナ川崎』は、駅と歩行者デッキで直結され、年間来店者2,000万人、同売上高350億円を見込む。来年春には総戸数667戸の高層住宅ゾーン（約1万7,000平方メートル）も、隣接地に完成する予定。

これに先立って同駅西口には、川崎市が取り組む「音楽のまち・かわさき」事業のシンボルとして、『ミュージア川崎シンフォニーホール』が2004年7月に開館。同事業は国の地域再生計画に認定され、ホールのフランチャイズオーケストラである東京交響楽団の活躍とも相まって、同市のイメージチェンジに威力を発揮している。

一方、イメージが良くなるに従って、川



今年9月、東芝川崎事業所跡地にオープンした『ラゾーナ川崎』

崎市に中枢機能を移す企業も急増している。富士通ネットワークソリューションズは、昨年8月に川崎区に本社を移転。化粧品会社のシーボンも、同年末に宮前区に製品開発や営業などの主要機能を集約。AV機器メーカーのディーアンドエムホールディングスも、今年2月に川崎区に本社機能を移転した。

三菱ふそうトラック・バス（東京都港区）は、今年末をめどに幸区に本社を移転。電子部品の製造用真空装置メーカーのキヤノンアネルバ（東京都府中市）は、来年夏に麻生区のマイコンシティ栗木地区へ本社機能と研究・生産施設の集約を計画している。

同市では、羽田空港の再国際化（09年）に併せて多摩川対岸の工場跡地を拠点整備する「神奈川口構想」、JR横須賀線の武蔵小杉新駅の開設計画、川崎縦貫高速鉄道（市営地下鉄）の建設構想などのビッグプロジェクトも進行。これらによりイメージチェンジが、今後急速に点から面へと広がるのが期待される。